

中国の理想郷

井波律子

国際日本文化研究センター

中国においては、不老不死の仙人が住む仙界や、あるいは山奥の隠れ里たる桃源郷など、さまざまな理想郷のイメージが、多様なヴァリエーションを生みだしながら、時代を越えて脈々と受けつがれ生きつづけてきた。

理想郷のイメージを具体的に描いた、とりわけ早い例は、『列子』の「湯問篇」に見える。ちなみに列子は、先秦時代（紀元前六世紀末～五世紀初、春秋時代の末か戦国時代の初めごろ）の道家的思想家の一人で、風に乗る仙人として知られる人物。『列子』は、その列子が著したとされる書物だが、じっさいには、その後数百年にわたって、おりおりの人が「列子」的だと考えた言葉や説話をそのなかに盛り込み、現在みられるようなかたちになった。むろんこのなかには、「原列子」ともいうべき、もともとの列子の言説も含まれる。この『列子』には、おびただしい数にのぼる説話が収録されており、その意味では、説話集あるいは奇想小説集ともいうべき性質をもつ。

『列子』「湯問篇」に見える二つの理想郷、「終北の国」と「東海の神山」も、そうした説話のスタイルによって記されたものである。これによれば、終北の国は、世界の北の果て（終北）にあり、周囲を高い山に取り囲まれている。こうして極北に位置するにもかかわらず、気候は温暖で住みやすく、住民は、国の中央にある「壺領」の山から沸き出る神秘的な水を飲むだけで無病息災、誰も彼も百まで長生きする。支配者はいないし、労働の必要もない。人々はみな気立てがよくて、もめごとをおこさず、ただのんびりと遊んで暮らし、生活をエンジョイするとされる。

この終北の国は、明らかに山の彼方に設定される理想郷、「山のユートピア」である。支配・被支配の関係の撤廃、労働の否定、長生願望の実現。現実の世界で、人は、権力者に泣かされ働きづめに働き、過労で頓死するのがオチだ。終北の理想郷は、そうした不本意な現実をくると逆転させたものにほかならない。まさに見果てぬ夢の結晶である。

かたや「東海の神山」のほうは終北の国に比べ、はるかにゴージャスである。東海のかなた、世界中の水が注ぎ込まれる帰墟の深海に、岱輿・員嶠・方壺・瀛州・蓬萊と呼ばれる五つの神山が浮かんでいる。これらの山には壮麗な金殿玉楼が立ち並び、美しい珠玉の樹が群生している。住民はみな玉樹の実を食べて不老不死となった仙人であり、空を飛び、五つの山を往来しながら楽しく暮らしている。つまりこの東海の神山は、先の「終北の国」が山のユートピアであるのに対して、海の彼方に設定される理想郷、「海のユートピア」なのである。

ただし、東海の神山は、永遠の楽園たる終北の国と異なり、この「海のユートピア」東海の理想郷にはアクシデントがおこる。すなわち先にあげた五つの神山のうち岱輿と員嶠が流失、沈没してしまうのだ。

すでに明らかのように、この事故のあと、残った三つの山、すなわち方壺・瀛州・蓬萊こそ、

不死願望にとりつかれた秦の始皇帝が大枚投じて、方士の徐福を団長とする大船団を派遣し、その所在を探索させた、かの「東海の三神山」である。

こうして『列子』描くところの山と海、二種の理想郷のうち、海の理想郷「東海の三神山」のほうは、探索に費用がかかりすぎるせいか、以後の理想郷探検史において廃れてしまった。始皇帝以後の皇帝たちは、ミニチュアの理想郷たる豪華な庭園を造営し、大きな池に三つの築山を浮かべて三神山に見立てたのだ。漢の武帝しかり、隋の煬帝しかりである。自らの庭園それじたいを理想郷、すなわち不老不死の仙人の住む仙界に見立てようとする庭園幻想は、ずっと時代が下った、かの清の西太后まで受け継がれる。西太后が、巨費を投じて修築した離宮頤和園の中心部分に位置するのは、「昆明湖」と呼ばれる湖である。この「昆明湖」は堤によって三つの部分に分割され、それぞれ中央には人工の島が築かれている。これぞまさしく、古代の皇帝以来の伝統的な庭園構想のパターンを踏まえた、「東海の三神山」のミニチュアにはかならない。

このように海の彼方の理想郷が、皇帝たちの庭園構想もしくは庭園幻想のなかに組み込まれていったのに対し、山の彼方の理想郷のほうは、現世的な身分や階層を問わず、肉体を不老不死のものとして化すことに成功し、仙人となった人々の住む「仙境」として想定され、中国的理想郷の主流となってゆく。もっともこの場合も、トポスとしての仙境に対する関心よりも、仙境の住人つまり仙人となる資格を、いかにして獲得するかが、主要な関心事となるケースが多い。

たとえば、前漢の劉向（前七九～前八）の作とされる『列仙伝』には、松の実や茯苓などの植物性の仙薬を、長期間服用した結果、肉体を不老不死のものへと純化することに成功した、七十余人の仙人の伝記が収められている。これらの仙人のなかには、むろん伝説上または歴史上の有名人もいるけれども、その大部分は、名もなき庶民の出である。彼らの現実社会の身分はいたって低く、馬医者、薬売り、鏡磨き、草履売り、産婆などを業とし、なかには乞食までいる。

修業の結果、仙人となったこれらの人々は、永遠の若さを保って何百年もの間、地上の世界を彷徨したあげく、最終的にこの世とは次元を異にする仙界に到達するとされる。だが、この場合でも、彼らが到達した仙界のイメージが具体的に描かれる例は、ほとんどない。

全然ないというわけではなく、たとえば『列仙伝』のなかに、仙人ならぬ凡人の邗子という人物が、偶然、山の洞窟をくぐりぬけ、宮殿のそびえたつ仙界にたどりついたという話がある。これは、仙境が山の彼方の理想郷であることを、端的に示す例だといえよう。しかしながら、奇妙なことに、ここで邗子が偶然、訪れた仙界において、とくに死んだ彼の女房が、魚を洗う仕事についていたとされる。だとすれば、この仙界は、死者を収容する冥界（冥土）とほとんど区別がつかないことになる。

ちなみに、もう少し時代が下った六朝時代になると、山東省の泰山の奥に「泰山地獄」と呼ばれる冥界があるとされ、さらに時代が下った南宋以降は、これがそっくり南に移って、四川省の酆都郊外の山奥の「酆都地獄」となる。いずれにせよ、冥界もまた山の彼方に設定される点では、仙界と変わりはない。異界という異界は、中国ではすべて山の彼方にイメージされるのだ。先にあげた『列仙伝』の邗子のケースは、いまだ仙界と冥界の境界がはっきりせず、異界として混同されていた時期の痕跡を示すものであろう。

それはさておき、道家的神仙思想が大流行した六朝時代になると、仙人になるための実践理論を説く葛洪著『抱朴子』が書かれるなど、仙人修業への関心はますます高まりを見せる。『抱朴子』の著者葛洪（二八三～三四三）は、仙人修業のメニューをこなし、首尾よく仙人になっ

た実例として、九十余人の仙人の伝記集『神仙伝』を著している。

先の『列仙伝』において、仙人は誰でもなろうと思えばなれる身近な存在として描かれていた。これに対して、約四百年後に書かれた『神仙伝』になると、仙人のエリート化ともいえるべき傾向がよくなる。エリート化といっても、現世的な出身階層が高くなったということではない。『神仙伝』に登場する仙人もまた、小役人や召使いなど、現世的な身分の低い者が多い。もともと著者の葛洪は、「しかるべき人でないかぎり、高い身分や豊かな富は仙人修業の邪魔になる」とし、仙人になるための機会そのものは、万人に共通だと明言している。ただ、『神仙伝』にとりあげられた仙人は、複雑な手続きときびしい試練を経てはじめて、仙人になることができた選ばれた人々として描かれており、それがすなわち仙人のエリート化ということなのである。

葛洪は、神仙思想の実践理論を説く『抱朴子』において、仙人になるためには、まず第一に鉱物性の仙薬「金丹」の服用が必須の条件だとしている。『列仙伝』にしばしば見られるような、植物性の仙薬を服用しているだけでは、不老長生は得られても不死の段階に到達することはできない、というのである。葛洪はまた、「金丹」の作り方をマスターするためには、すぐれた師匠につき、試練に耐えて修業を積み重ねなければならないと述べる。さらにまた、葛洪は、こうして修業を積んでも、誰もが「金丹」を得て昇天、仙界に到達できるわけではないとし、仙人を三つのランクに分けたりしている。すなわち、みごとに昇天する「天仙」、昇天はできないが数百年も地上に留まり生き続ける「地仙」、いったん仮死状態となったのち再生する「尸解仙」が、これにあたる。

こうした仙人理論を踏まえて、著された『神仙伝』には、いかにして登場人物たちが、仙人になるための修業の過程をクリアしたかに、焦点を絞った話が多い。その委曲を尽くした叙述方法は、先行する『列仙伝』と比べ、はるかに巧妙だが、ここでもやはり仙界それ自体の位相についての言及は、きわめて乏しいと言わざるをえない。

このなかで注目に値するのは、かの「壺中天」の話だ。小役人の費長房が、薬売りに伴われ、薬売りの壺公（実は仙人）が、商いをする場所の軒下にぶらさげている小さな壺のなかに入ったところ、そこに宮殿楼閣がそびえたつ仙界が広がっていたというものである。

この壺中天の話と、先にあげた『列仙伝』の邗子の話には、二つの共通点がある。第一にあげられるのは、費長房は小さな壺の口を通過して壺中の仙界に到達し、邗子はせまい洞窟を通過して山のかなたの仙界に到達するという具合に、両者とも、人間世界と仙界の境界に位置する装置（洞窟や壺の口）を通過している点である。

付言すれば、こうしてせまい壺の口や洞窟をくぐりぬけた向こう側に、仙界のみならず、異界を設定する発想のヴァリエーションは、その後、しばしば中国古典小説に出現する。たとえば、「邯鄲の夢」の成語のもととなった唐代伝奇小説の「枕中記」（沈既濟作）において、主人公の盧生は仙人の呂道賓に導かれて、青磁の枕の穴の中に広がる世界に入り、すべての願望が充足する経験をしたとされるし、やはり唐代伝奇の「南柯記」（李公佐作）において、主人公の淳于芬は、庭の槐の木の下に広がる「槐安国」（実はアリの世界）なる国で、やはり人生の転変をつぶさに味わったとされるのは、その顕著な例であろう。

さらにまた、「壺中天」との関連でいえば、宋代話本小説（もともとは講釈師の語った話）のひとつ「西山一窟鬼」——これは登場人物のほとんどが幽霊という奇怪な話である——は、最後にハゲ頭の道士（道教の僧侶）が登場し、術を使って幽霊どもを小さな瓢箪の口から中へ吸い込んでしまうという結末になっている。この瓢箪はふつうの人間にとっては単なる瓢箪に

過ぎないが、幽霊にとっては「酆都の地獄」になるというのだ。「酆都」とは先にあげたあの冥界の地獄装置である。こうしてみると、壺の中の世界は、反転して理想郷の仙界ともつながるし、これとは逆に地獄ともつながることになる。いずれにせよ、先にも少しくふれたように、中国の二つの異界すなわち仙界（天国）と地獄は文字どおり紙一重、トポス的にみた場合、ほとんど区別がつかないことになるのである。

話がわき道にそれた。『列仙伝』の邗子の話と『神仙伝』に見える壺中天の共通性に話をもちそう。この両者とも、人間世界との境界に設けられた装置（洞窟や壺の口）を通過し、仙界に到達したとされるに続き、今ひとつの目立った共通点は、邗子も費長房も仙界の住人つまり仙人ではなく、俗界からの偶然の訪問者だということである。当然といえば当然のことながら、現実と次元を異にする仙界は、仙人ならぬ俗人の視線にさらされたときに始めて、その貌をかいま見せるのだ。

以後、仙界をテーマとした物語のほとんどは、上記の二点を踏まえ、「仙界訪問譚」のスタイルで作られてゆく。その意味では、葛洪よりほぼ九十年後に生を受けた、陶淵明（三七六？～四二七）が顕した「桃花源記」は、まぎれもなくこうした仙界訪問譚のヴァリエーションだといえよう。一人の漁師が舟で谷川をさかのぼってゆくうち、桃の花が咲き乱れる林に行き当たる。林は川の水源地で終わり、そこに一つの山があった。山には小さな洞窟があり、そこからほのかに光が射しているように見えたので、すぐさま舟を乗り捨て、洞窟の口から中へ入っていった。洞窟の中は初めはとてもせまかったが、どんどん奥へ進んで行くと、突然目の前がからりと開け、のどかな田園風景があらわれた。ここは五百年も前から代々、外界と没交渉ですごして来た人々の住む隠れ里、別世界だったのだ。こうした物語的な展開からは明らかに、仙界訪問者の役割を振り当てられた漁師が、境界のせまい洞窟をくぐって、仙界に相当する桃花源に到達したというコンセプトを、よみとることができる。

この「桃花源」の物語こそ、『列子』の「終北」以来、中国人の意識の深層で生き続ける、山の彼方の理想郷への憧憬を、練り上げられた仙界訪問譚のスタイルを応用しつつ、みごとに具象化したものといえよう。

以上のように、仙界と陶淵明描くところの桃源郷には、トポスの同質性がみられるが、実は、この二つの世界は、その時間構造においても、明らかに共通性がある。ふつう仙界の時間の流れは人間世界と比べて、はるかに波長が長くゆるやかだとされる。そうした仙界の時間構造を、端的にあらわす例としてあげられるのは、六朝の梁の時代に任昉（四六〇～五〇八）によって編纂された、志怪小説集『述異記』をはじめとする諸書に見える、「爛柯説話（腐った斧の話）」である。ちなみに任昉は、陶淵明より約百年後に生をうけている。「爛柯」の話には、さまざまなヴァリエーションがあるが、ほぼ共通して次のように展開される。

王質という樵が道に迷い、石室山（浙江省）のアーチ型をした洞窟の中で、碁（碁）に興じる二人の童子（仙人）に出会った。王質はすすめられるまま、棗の核のようなものを食べたところ、空腹感はすっかり消えてしまった。そこで手にもっていた斧を地面において、しばらく彼らの勝負を観戦した。やがて、童子たちにうながされ、ふと我にかえると、傍らの斧の柄がすっかり朽ち果てている。かくして山を下り村に帰ってみると、もはや知る人もいない。王質が山のなかで仙人の碁の勝負を見ている間に、なんと下界では何十年もの歳月が流れていたのである。

これは基本的に、竜宮城に行った浦島太郎の話と、同じ構造をもつ話だといえよう。もっとも、王質は山奥で仙人たちと出会い、浦島太郎は海の底の竜宮城に連れて行かれたのだから、

そのトpos（位置）は、かたや山かたや海と、明確に異なっているけれども。

この「爛柯説話」から見てとれるように、仙人たちの住む世界（仙界）は、人の一生をほんの一瞬とみなすような、おおいなる天地運行の宇宙のリズムに乗って、ゆったりと流れている。仙界の一瞬は、人間世界の何十年、何百年にも相当するのである。この説話の主人公の王質は、仙界の食物を食べたために、人間世界の時間の流れからはみだし、知らず知らずのうちに、ゆるやかな仙界の時間の流れのなかに迷いこんでしまったといえる。

また王質もやはり洞窟のなかで、二人の仙人に出会ったとされており、ここでも、明らかに洞窟が人間世界と仙界の境界をなす装置として作用している。こうして見ると、境界装置の洞窟や穴は、人間世界と仙界に時間速度を切り替えるポイントともなっていることが、わかる。

付言すれば、こうして洞窟や穴が、時間速度切り替えのポイントになるという点では、先にあげた唐代伝奇小説の、枕の穴から異界に入った「枕中記」や、槐の木穴から別世界に到達した「南柯太守伝」のケースは、いっそうはっきりしている。ただし、これらの作品にあらわされている異界の時間の流れは、ゆるやかな仙界の時間の流れとは反対に、おそろしくテンポがはやい。たとえば「枕中記」の主人公盧生が、枕の中の世界で五十年以上も活躍し、栄光の生涯を送ったにもかかわらず、ふと目が醒めると、眠りこむ前に、茶店の主人が炊きはじめたキビ飯すら炊きあがっていなかったとされる。枕の中に広がる異界の数十年は、現実の人間世界の一瞬にすぎないのである。「南柯太守」に描かれる木の穴の中に広がる異界の時間構造もこれに等しい。

「枕中記」や「南柯太守伝」に出現する異界は、ミニチュアの世界にほかならず、ここでは時間の流れもまた急テンポになるのだ。だから、「爛柯説話」的な仙界訪問譚では、人間世界と仙界の境界にある洞窟や穴が、時間の速度をおとすための切り替えのポイントとして設定されるのに対して、「枕中記」や「南柯太守伝」のような異界遍歴譚では、逆に時間速度をあげるポイントとして設定されているともいえよう。

このように、あらわれかたこそ対照的だけれども、その実、「爛柯説話」と「枕中記」および「南柯太守伝」の言わんとすることは、究極的に一致している。すなわち、「爛柯説話」的な仙界訪問譚が、宇宙的なリズムで運行されるマクロコスモスの時間感覚によって、人間的時間を相対化しようとするものだとすれば、「枕中記」は、マクロコスモスを反転させたマイクロコスモスの時間感覚によって、栄華も一瞬の夢という具合に、人間的時間を相対化しようするのである。

では、陶淵明の描く桃源郷の時間構造は、どうなっているのだろうか。この桃源の隠れ里では、秦末の戦乱を避け、先祖が住み着いて以来、住民たちは五百年以上、外界と没交渉で、子々孫々、変化のない穏やかな生活を続けている。代はかわっても、同じリズムで同質の生活が反復されるだけなのだから、実際には五百年以上、時間は流れていないに等しい。だとすれば、桃源郷に流れている時間もまた、「爛柯説話」に見られるような、波長の長くゆるやかな仙界的な時間のヴァリエーションの一つだということになる。

こうしてみると、陶淵明描くところの桃源の村、桃源郷は、山のかなたの理想郷というトpos的な観点からみても、そこに流れる波長の長い時間構造の観点からみても、仙人たちの住む世界すなわち仙界と同工異曲、同じ土台の上に組み立てられた世界に、ほかならないのである。

仙界にせよ桃源郷にせよ、こうしたかたちで表現される伝統的な中国の理想郷は、進歩も含み、およそ変化というものを拒絶する世界だということは、おおいに注目に値する。考えてみれば、不老不死（Immortal）とは、年老いることも死ぬこともなく、永遠の若さを「保持」

井波律子

しつづけることだ。悠久の自然、悠久の宇宙のリズムを体得し、不変の生命を保った者の住む楽園こそが理想郷だとする、中国的理想郷観の根本にあるのが、道家老荘思想ひいて道教であることであることは、いうまでもない。その意味で、伝統中国の“**Ideal Land**”は、まさしく“**Taoist paradise**”なのである。